

## 小学生の部

### 最優秀賞

神奈川県知事賞

#### はずかしい僕と助けたい僕

伊勢原市立伊勢原小学校

五年 萩原隼翔

僕の兄は、今年の一月にシーバー病というかかとの骨に炎症が起こる病気でギブス固定しなければいけなくなり、松葉杖で二カ月間生活していました。

登校する時は父に車で送ってもらい、下校では学校に許可をもらいバスを利用していました。母に「今日はむかえに行けないから、帰り一緒に帰って荷物持ってあげて。」と頼まれましたが、友達と帰りがたかったし面どうでいやでした。

兄はランドセルが背負えないのでリュックを使っていました。しょう降口で待ち合わせして一緒に帰る時、みんなに見られて目立っていたのでとてもはずかしくていやな気持ちにな

りました。

でも兄は僕に「荷物を持ってくると歩きやすく助かるよ。ありがとう。」と言ってくれました。ふと気づいたら、兄は人目を気にせず堂々と歩いていました。冬なのに顔に汗をかきながら一生けん命歩いている姿を見たら、はずかしいと思っていた僕の気持ち申しわけなくて何も言えませんでした。仕事から帰って来た母に「今日はありがとう。いぶき大変そうだったでしょ?」と言われて僕は正直に「みんなに注目されていやだったんだよね。いぶきはすかしくないのかな?」と言ったら母は「うーん：はずかしい気持ちよりも必死なんだと思う。足をケガして不自由だけど前向きに頑張ってるからさ。いやだったら一緒に帰らなくて大丈夫だよ、ありがとね。」と言われて荷物を持つだけで兄の助けになるなら、明日もがんばろうかなと思いました。

身近に困っている人がいて初めて気付くことが沢山ありました。福祉は自分が出来るはんで出来ることを強制されずにすることが相手にとっても受けとりやすい助けになるのだと感じました。